

品川の横穴墓

横穴墓とは

古墳時代の埋葬施設のひとつである横穴墓は、一般に知られる古墳（高塚古墳）とともに古墳文化を知る上で重要な情報を提示している。横穴墓は、古くは明治時代から注目され、土蜘蛛と呼ばれる先住民の住居か、埋葬空間か、という「穴居論争」が繰り広げられたことがある。横穴古墳、横穴式古墳、横穴などの名称で呼ばれることもあり、高塚古墳の横穴式石室と類似することが特徴である。

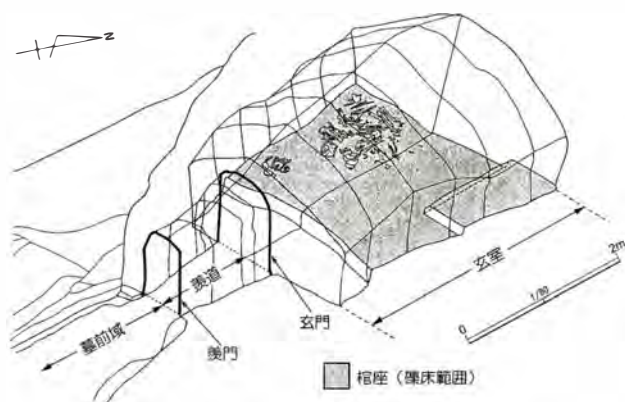
横穴墓が構築される主な時期は、古墳時代でも後期から終末期（5世紀末～7世紀代）である。この時期は、首長墓の墳墓である前方後円墳を主体とする大型の古墳のほかに、「群集墳」とよばれる小規模な古墳が密集して造られるようになる。横穴墓も数基から100基以上という規模で群集し、古墳時代の群集墳形態を示している。日本で横穴墓が造られる地域は、北九州・山陰・北陸・東海・関東・東北地方が主な分布地としてあげられ、地域ごとに多様な様相を展開している。東アジアにおいては、朝鮮半島でも確認されており、北九州と朝鮮半島との文化交流を示すものとして注目されている。

横穴墓の構造

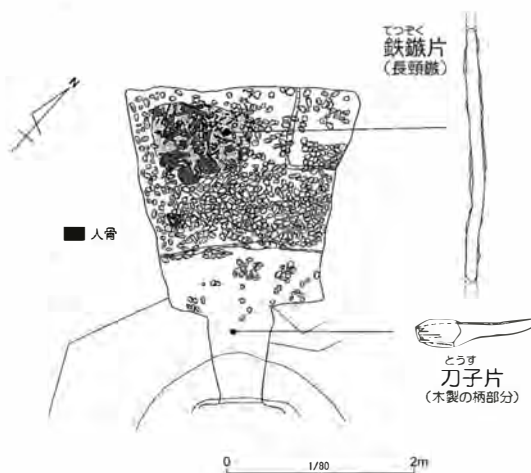
横穴墓は、墳丘をもつ高塚古墳とは異なり、山の斜面や崖に横穴を穿って造られた埋葬空間である。その構造は、入り口に通じ、祭祀が行われると考えられる「墓前域」、黄泉の国への通路といわれる「羨道」、遺骸を安置する「玄室」からなる。玄室形態は、矩形や羽子板形、胴張り形など様々で、地域独自の展開を示す場合が多い。また、玄室自体も床に礫を敷く「礫床」や、炭を敷く「炭床」、貝を敷く「貝床」などが確認されているほか、造り付けの棺座や高壇を有することもある。

横穴墓の被葬者

横穴墓に埋葬される被葬者を考える上では、埋葬人数が一つの指標となる。横穴墓には数人から十数人分の人骨が検出される場合が多く、これは一つの埋葬施設に数人が順次埋葬される「追葬」の結果によるものである。被葬者は、成人男性のみならず、成人女性や未成年も多いことから、家族墓的な役割を持っていたと考えられている。



横穴墓の名称



品川の横穴墓

東京都を横断する多摩川流域には、多くの横穴墓が築造されており、品川ではこれまでに南品川横穴墓群（1960年調査）と大井金子山横穴墓群（2000年調査）が発見されている。

大井金子山横穴墓群 大井金子山横穴墓群は、東京都品川区西大井4丁目に所在し、東京都を横断して流れる多摩川の左岸、武蔵野台地上^え荏原^{ばら}の舌状台地上に位置する。海拔15～20m程の斜面からは3基の横穴墓が発見された。

大井金子山横穴墓群の北東約2.5kmの同一台地上には40余りの横穴墓が構築されている。

築造年代は、玄室形態からおよそ7世紀前半と考えられ、第1・3号墓の玄室に遺存していた人骨は埋葬当時の状態を示していた。

第1号墓出土人骨の分析から、成人男性3人、成人女性2人、未成人1人、小児2人の最小人数8人が埋葬されていたことが判明した。

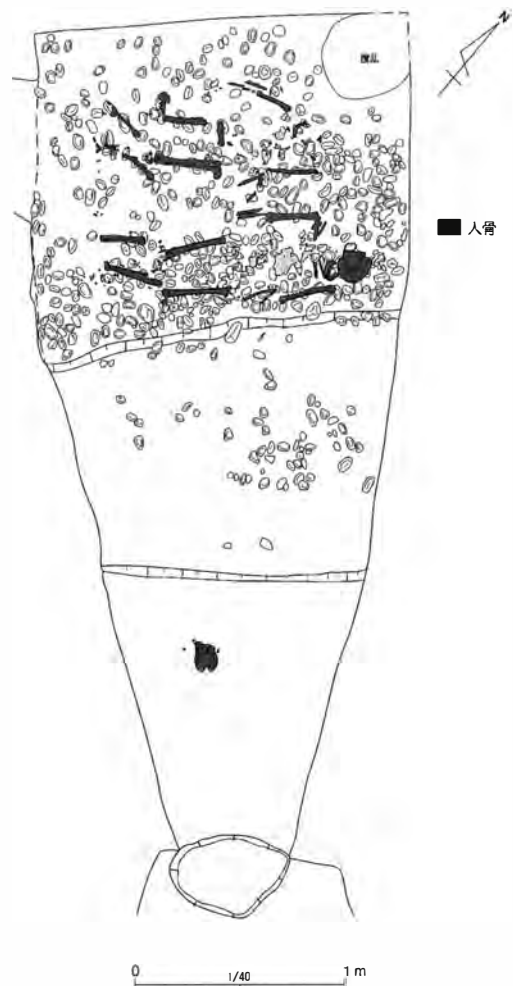
特に注目されるのが、骨が集骨（^{しゅうこつ}まとめられる）されていたことであり、意図的に骨を動かしたことが確認できる。この先葬者^{せんざう}をかたづける行為は、追葬の際や、改葬（骨を他の場所へ移す）の際に玄室内で前の人の骨を寄せたり、集めたりしてから次の被葬者を埋葬するものである。

一方で、第3号墓は、追葬の際にかたづけることなく埋葬していることが看取され、横穴墓によって埋葬方法が異なる点でも大井金子山横穴墓群は、貴重な情報を提示している。また、第2号墓からは、礫床に付着して漆喰^{しつくい}が検出されている。同様の漆喰は東京都日野市で発見された梵天山横穴墓群の玄室全体を漆喰で塗る装飾に関連するもので、類似したものであると考えられる。

南品川横穴墓群 南品川のゼームス坂上の恒陽印刷^{くわう}（株）の工場拡張工事中に発見された横穴墓で、調査によって人骨と鉄製釧片^{おおい かしま}が出土している。この横穴墓群は、大井鹿嶋遺跡にほど近いことから、両者の関連が想起される。



- 1 南品川横穴墓群
- 2 大井金子山横穴墓群
- 3 大井鹿嶋遺跡（現：品川歴史館）



品川区大井金子山横穴墓群第3号墓